

学位論文要旨および審査要旨

氏名 SELO YUDIBRATA

(学位)	種 類 博士(学術)	論 文 項 目	観光開発が住民の生活環境と健康に及ぼす影響－インドネシア Kampung Dukuh 現地調査による考察－
	授与番号 博甲国第30号		
	授与年月日 平成26年3月31日	論文審査委員	主査 高坂宏一
	授与の要件 学位規程第5条		副査 野山 修 今井秀樹

学位論文の要旨

インドネシアは1947年に観光開発を開始し、現在、観光産業は国家収入の30%を担う重要な産業に成長している。豊かな自然、および300以上ある民族の文化や伝統生活は、インドネシアの魅力であり、観光客が毎年増加している。本研究対象であるKampung Dukuhはインドネシアジャワ島中西部、Garut市に位置する。340年の歴史を持つ伝統的な集落として知られ、住民は集落に伝わるルールを尊重し、厳しく守って生活してきた。しかし、2003年に西ジャワの観光芸術文化省により観光目的地として宣言されたことから、集落の奥にある聖地への巡礼者を中心とした観光客が年々増加している。以下、巡礼者を含めて観光客と記載する。本研究者は社会的・文化的な調査を2002年から2004年にかけて行い、Kampung Dukuhを訪れた観光客の増加に伴って、住民の一部に伝統的なルールを守らない人々が生じていることを明らかにした。さらに2008年の調査では、観光客の更なる増加によって環境や生活習慣が大きく変化してきていることが認められた。このような変化は、住民の健康状態に影響を与えていると考えられる。以上を踏まえて本研究はKampung Dukuhにおける観光客の増加が住民の生活環境と健康に及ぼす影響について、健康科学の分野である人類生態学的な調査を行い、客観的なデータに基づく分析を行うこととした。

Kampung Dukuhの伝統文化の特徴は3つある。人間関係に関する伝統、生活に関する伝統、宗教と聖地に関する伝統である。Kampung Dukuhの広さは17ヘクタールで3つのエリア、すなわち、聖地(7ヘクタール)、居住地、農地に分れている。居住地は3つのエリアに分けられており、エリア1は内Dukuhと呼ばれていて最も聖地に近い。エリア2とエリア3は外Dukuhと呼ばれている。内Dukuhと外Dukuhの違いは伝統的ルールの違いである。例えば、内Dukuhの家は材料や建て方に一定の規則があり、屋根は瓦でなく葦葺き、壁は木材ではなく編み竹、窓にガラスは使えない。一方、外Dukuhの家は自由であり、コンクリートの使用も可能である。また、内Dukuhには電気が入っていないので電化製品の使用はできないし、携帯電話の使用も禁止となっている。こうした違いは内Dukuhに住んでいる住民が祖先から伝わってきた簡素な日常生活を伝統文化として維持しようとしているからである。内Dukuhのエリア1は居住地区のうち、最も奥の聖地に近く、観光客が必ず訪れるため、全ての住民が観光客と接触している。外Dukuhのエリア2は、エリア1よりは観光客との接触頻度が減る。エリア3はさらに接触頻度が少なく、住民の半数程度しか観光客と接触しない。

本研究の対象はKampung Dukuhの成年住民(インドネシア成年の年齢は17歳から)と政府機関である。成年住民には調査と測定を行い、また、政府機関には必要なデータ収集を行った。2012年4月までの人口は558人、そのうちの成年は225人であった。調査は、予備調査を2011年11月に、本調査を2012年10月10日～11月16日にかけて行い、96人についてインタビューすることができた。聖地での巡礼式は土曜日に行われるので、観光客のほとんどが前の金曜日から翌日の日曜日まで滞在し、その他の曜日には観光客の滞在は皆無である。このことから、金曜日から日曜日までは観光客の滞在がある日(以下、客有日)、月曜日から木曜日までは観光客の滞在が無い日(以下、客無日)として、両方の日にデータをとり、比較した。また、客有日において、観光客との接触頻度が異なるエリア2と3の住民について観光客との接触の有無でデータの比較を行った。住民を対象とした健康に関する調査項目は、生活活動調査、食事調査、THI(the Total Health Index)、皮脂厚を含む身体計測である。環境に関する調査項目は生活用水の大腸菌調査および騒音測定である。データの分析にはSPSS21.0Jを用いた。なお、本調査は杏林大学大学院国際協力研究科研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

1. 生活活動調査:

この調査は客有日と客無日それぞれについて、住民の1日(24h)生活活動を調べ、6つカテゴリ化(睡眠、無、静、低、中、高活動)によって1日の必要なエネルギーを求めた。客有日の住民の、睡眠、無活動、静的活動、高強度活動は客無日より短くなったことが分かったが1日あたりのエネルギー必要量は客有日と客無日の間に有意差は認められなかった。

2. 食事調査:

観光客の増加に伴う住民の食習慣の変化を調べるために調査票を用いてインタビューを行った。摂取した食材の種類および量を調べ、1日に摂取したエネルギー量と3大栄養素(糖質、脂質、蛋白質)摂取量を計算した。客有日と客無日の各摂取量に有意差は無かったが、客有日のエリア2と3および、男女の間に、全ての項目の摂取量に有意な差が認められた。

3. THI(the Total Health Index)調査:

主観的健康チェック票THIのインドネシア語版を用いてインタビューを行った。17の健康尺度点数について、観光客との接触の有無、性別、エリア別、および年齢層別(17～40と41～)で分析した結果、観光客との接触は、肉体面より、心理面に不健康な影響を及ぼす可能性が示された。

4. 体格測定

観光客の増加が住民のエネルギー出納に及ぼす影響を調べるため、体格測定を行った。調査項目は身長、体重、胸囲、腹囲、皮下脂肪厚である。皮下脂肪厚はHoltain式キャリパーを用いて7カ所(上腕背部、上腕前部、肩甲骨下部、体側腋下部、腸骨上部、腹部、大腿部)について測定した。なお、女性の被験者については現地の女性協力者に依頼して測定した。測定の結果、身長、体重、FFM、BMIにエリア間の有意差は認められなかった。

5. 大腸菌検査

Kampung Dukuhには汚水浄化槽の衛生的な処分システムが無いので、尿尿は魚を育てている池へほとんど流されている。乾季の時や訪れた観光客が増加した時にはトイレの周辺から悪臭が生じる。また、いくつかのトイレや池の近くに井戸があるので飲用水への汚染が懸念されることから、汚染の可能性が高いと思われる4カ所(神聖所の水源、モスク外側の水池、とエリア2にある2つの井戸水)から採水し、バンドン工科大学(ITB)の環境工学部の水質研究室で大腸菌の検査を頼んだ。全ての生活用水から大腸菌が検出された。特に観光客の使用が多いモスク周辺の汚染が顕著であり、観光客増加の影響の可能性が考えられるが詳細については検討が必要である。

6. 騒音測定

観光客の交通手段にはバイクも多く、住民とのコミュニケーションによる音の発生も著しいことから、騒音測定を行った。測定場所は、エリア1のリーダー家の周辺、巡礼式所の周辺、エリア2の周辺、エリア3の周辺の4カ所とした。測定は、騒音計(RION製NL-20)を用いて各所30分間ずつ2回(1回目は客無日、2回目が客有日)行い、等価騒音レベル L_{eq} を求めた。4カ所とも、客有日の騒音レベルは、客無日より高く、インドネシアの環境基準値をも上回っていた。

本研究の結果、伝統を重んじるKampung Dukuhにおいて、観光客の増加に伴い、様々な環境変化と健康影響が生じていることが客観的な数値を持って示すことができた。今後、こうしたデータを用いることで、環境と住民の健康を守るにはどのようにすればよいか、訪問先への負の影響を減らすような観光開発はどのようにすればよいかといった検討を行っていききたい。

論文審査結果の要旨

本研究は、観光客(巡礼を主目的としている)の増加による住民の生活と健康への影響を、インドネシア西ジャワ州の農村地域にあるイスラム教の聖地を持つ村において検討したものである。

本研究の対象はKampung Dukuhとその住民である。Kampungは生活共同体の基本単位であり、村と捉えても大きな間違いはないが、行政単位の村とは異なり、あくまでも生活共同体である。

本論文の筆者はバジャラン大学在学時からこの集落の特色、すなわち住民が自主的に伝統文化の維持を重要視して生活していることに興味を持ち、この集落をフィールドとして調査を行ってきた。2002年から2004年にかけて断続的に行った文化人類学調査で、当集落の住民が伝統を維持しようとする意識は変わらない一方で、社会変容が起こっていること、そしてそのもっとも重要な要因は観光であったことが本研究を行う契機となっている。なお、2008年にはインドネシアにおける観光産業の重要性について分析し、修士論文「インドネシアにおける観光発展戦略の考察」を成している。

本研究は、以上の経緯と予備調査を踏まえ、現地調査によって食べ物の種類や量、睡眠時間、労働の内容や時間の变化、飲み水の汚染といった生活環境の変化のデータを収集し、Kampung Dukuhにおける観光開発が住民の生活環境と健康状態に及ぼす影響について分析、検討したものである。

現地調査は2012年10月～11月に行われている。集落の住民558人のうち、17歳以上の成人225人を対象とし、調査内容を説明して同意が得られた人のうち、調査期間に、インタビューすることができた96人のデータを用いている。なお、本研究調査の実施については杏林大学大学院国際協力研究科研究倫理審査委員会の承認を得ている。

調査項目と分析方法は以下の通りである(1～5が調査項目、6が分析方法)。

1. 生活活動調査
観光客が滞在する日としない日のそれぞれ任意の1日の行動について思い出し法により、起床から就寝までを1時間単位で記録してもらい、生活時間のデータを得ている。
2. 食事調査
観光客が滞在する日としない日のそれぞれ任意の1日に摂取した食材の種類と量を思い出し法により記録してもらい、インドネシアの食品成分表に従って、摂取エネルギー量および、糖質、脂質、蛋白質の摂取量を計算している。
3. 体格測定
観光客の訪問に伴う生活活動の変化が消費エネルギー量に影響し、食事内容の変化が摂取エネルギー量に影響することを念頭に、住民の体格測定を行っている。測定項目は、身長、体重、胸囲、腹囲、皮下脂肪厚(以下、皮脂肪厚)で、対象者のFFM(Fat Free Mass)を推定し、身長と体重よりBMI(Body Mass Index)を算出している。
4. THI(the Total Health Index)
観光客の健康への影響を全般的に調査するためにTHIを行っている。THIは130問の3択式質問項目からなる調査票で、心身の個別的健康面が12個の尺度の得点で定量的に把握される。さらに、3つの疾病(体のストレス、心のストレス、統合失調症)の判別値および、2つの総合尺度(心身総合不健康、体不健康心普通)についても評価可能である。調査はインドネシア語版THI(the Total Health Index)を用い、対象者の自宅を訪問してインタビューしている。
5. 生活用水の大腸菌検査
飲料水が、尿尿に汚染されている可能性があると考えられる4つの異なる水源からサンプルを取り、バンドン工科大学環境工学部の水質研究室に依頼して大腸菌検査を行っている。
6. データ分析

上記の調査項目データを変動させる要因は複数考えられるため、はじめに多変量解析を行っている。分析は、観光客の影響を示す因子として①観光客が滞在する日としない日、②観光客との接触の有無、③観光客との接触の程度が異なる3つの居住地区、さらに、それ以外の因子および共変量として④性別、⑤年齢、を想定し、どれが有意に働いているかを重回帰分析またはロジスティック回帰分析で調べている。次に、有意であった因子が、各データの變動にどのように関与しているかを、分散分析およびt検定またはU検定を行って調べている。分析には統計ソフトSPSSVer. 21.0を使用している。

分析の結果得られた主な知見と考察は以下の通りである。

1. 重回帰分析またはロジスティック回帰分析の結果、観光客の影響が有意であったのは、以下の項目であったとしている。
 - ①生活活動調査:睡眠、無活動、礼拝、テレビ視聴、食事、農作業といった活動時間。
 - ②食事調査:エネルギー摂取量および、糖質と蛋白質の摂取量。
 - ③THI:多愁訴、神経質、抑うつ、といった精神的な健康尺度。
2. 上記の重回帰分析で有意であった因子がデータの變動にどのように関与しているかについて以下の結果を得ている。
 - ①観光客の滞在により、農作業などのエネルギー消費量が多い活動に関する時間が短くなり、巡礼式の手伝いなどのエネルギー消費量が比較的少ない時間が長くなっている。
 - ②摂取したエネルギー量や栄養素の量は、平均年齢が低く観光客との接触頻度が中程度の地区が、他の地区より多い。
 - ③観光客との接触頻度が異なる3つの地区間で体格の有意な差は男女ともに認められない。
 - ④THIの結果、観光客の滞在や接触による健康影響は、身体的側面より、精神的側面について女性に認められている。一方、男性には認められず、観光客との接触がストレスになる可能性について考察している。
 - ⑤水質検査の結果、全てのサンプルから大腸菌が検出され、更に詳細な検討が必要であること、今後の観光客の増加に対応できる衛生環境整備が必要であるとしている。

以上が論文の概要である。審査ではデータの分析方法をはじめ論文構成や用語の適切性など多岐にわたる指摘と質疑応答がなされ、審査員の大幅な修正の求めに応じて改訂された。本論文は著者自身の地道な現地調査によって得られたデータにもとづく研究でありそれを可能にしたのは10年以上にわたる現地の人々との良好な関係の構築である。また、本論文は観光開発の研究に関して健康影響、環境問題、住民の意識と行動変容という新たな視点から取り組んでおり、地域研究として、また観光研究の分野においてオリジナリティが高く、今後この分野の研究に少なからず貢献すると考えられる。以上、審査員の指摘に応じて修正された本論文は、審査員全員が学位授与に値すると判断した。よって合格とする。

氏名 関 口 美 緒

(学位)	種 類 博士(学術)	論 文 項 目	日本語心理動詞の研究 - 生理的・心理的現象から言語表現
	授与番号 博甲国第29号		までを考える -
	授与年月日 平成26年3月31日	論文審査委員	主査 金田一秀穂
	授与の要件 学位規程第5条		副査 今泉喜一 山岡政紀

学位論文の要旨

本研究は、日本語の心理動詞を扱う。心理動詞とは先行研究で共通した定義にあるように「人間の心理」の動詞表現について扱う研究である。まず「人間の心理」から知る必要があると考えられる。その考えに従えば、「感覚動詞」は人の「感覚」を表現し、「知覚動詞」は人の「知覚」を表現する。しかし、先行研究では「心理動詞」の下位分類において明確な科学的根拠が提示されていなかった。そのため、言語学の知識や経験に頼ってきたことで、ばらつきのある解釈や様々な分類がなされてきた。特に、「感覚」と「知覚」、「感覚動詞」と「知覚動詞」の解釈の違いがある。五感に関する「感覚」を表現する動詞を「知覚動詞」として分類し、「知覚」を表現する動詞が「感覚動詞」と分類する解釈がある。一方、科学的定義どおり「感覚」を「感覚動詞」とする解釈など様々である。また、科学的な「感覚」の定義の範囲と言語表現の「感覚」の意識の違いなど多くの問題がある。本研究では、心理動詞研究にはまず身体・心理のメカニズムを知る必要があるという視点に立つ。つまり、動作や運動について知らなければ動作動詞の詳細な研究をすることは困難であり、歩行と走行の動作学的¹⁾な定義の差異を知ってこそ、「歩く」と「走る」の違いを述べるができるという考え方である。本研究では動詞で表される内容の基本的定義をしたうえで、言語表現とのつながりを考察した。

科学的分野では、言語表現というのは人間の身体反応や行動の中にある一面にしかない(Benson, Damasio他)とか、最終のプロセスにしか過ぎないとか考えられている。

それ以前の身体反応が言語表出に大きく影響を与えるが、そこで身体変化が精神変化とつながり、最終段階の心理状態が導かれ、それが言語選択に大きく関わるのである。この考えは、認知言語学などにすでに応用されているが、心理の言語表現を集中して扱ったもの²⁾は数多くない。本研究でも閾値という生理的現象が言語的に特徴ある現象を生み出している関係を発見した。心理状態は内面的ではっきりしないと言われるが、身体変化に注目すると、心理変化は明らかに身体変化に伴って生起している。その身体変化には物理的・化学的な動き(ホルモン・血液・神経系のシナプスとニューロン間の化学物質の流れ等)があるはずである。物理的に物質が移動するという事は、客観的に判断できるという事であり、これについて数値的に証明可能なデータもある。それらの解明によって心理動詞の時間経過(アスペクト)に関する謎も解決する可能性がでてくる。また心理動詞の言語表現は、工藤が「内的情態動詞」と呼ぶように、ことばが人間の内面で生起することが条件となる。これには、心の内に生起した心理が言語表出されるものも、内言や内観のように自分自身の中で処理されるものも含まれる。言語表出される時は、多様なことばの表現が浮かんだ中から限定されたことばに絞り込まれる。それは自分自身に問う時もあり、また他人に伝達する時もある。内言や内観の場合は、言語表出よりも曖昧で言語選択範囲も広くなる。しかし、本研究では言語表出や会話には深く触れず、あくまで言語表現にいたるまでの過程に焦点をあてる。

- 1) 動作学(Kinesiology)では両足の接地に関する相違による。また、運動処方(Exercise program)では歩行・走行の速度(日速律)による(トレッドミル等の)設定の相違による。
- 2) 河原(2000)の心象表現論ではかなり科学的分野の研究に触れている。

本研究ではこのような方針の下、語用論の見方を中心に心理動詞を4つに分類し、その下位分類にしたがって論を進めた。

第1章は感覚動詞について扱う。科学的解釈による「感覚」の定義を参考にし、言語の面から「感覚動詞」の定義を定めた。ここでは感覚と知覚の違い、科学的解釈と言語表現の違い、五感それぞれの感覚動詞についての特徴を述べた。そして感覚動詞のアスペクトに触れた。また五感それぞれの並列的な関係ではなく、刺激源から感覚受容器までの距離の違いが言語表現にまで影響を及ぼしていることを論じた。

第2章では知覚(動詞)について考察した。知覚は、刺激信号が感覚器官から入力された後、知覚表象と呼ばれる知覚認知に至る過程として位置づけられる。つまり感覚の次の伝達経路であり、その刺激信号は身体内部から発せられる。これらの身体変化を表現する動詞を知覚動詞として扱う。知覚動詞の下位分類については様々な基準が考えられ、それによって分類が異なる。知覚は身体と精神のどちらにも作用する。それらが言語表現となる場合、身体作用から精神作用へ影響を及ぼす語、それとは逆に精神作用が身体作用に影響を及ぼす語など知覚特有の特徴がある。またアスペクトの面では、知覚動詞は感覚動詞のアスペクトとは相反し、感覚で進行局面に重点があるのに対し、知覚動詞では進行局面の後の結果の継続に重点がある。

第3章は感情動詞について主に心理学的側面から考察した。感情には身体作用と深く関わる情動の段階から社会的背景を伴う高次な感情までの段階がある。このことを考慮しつつ感情動詞を分類した。また日本語には喜怒哀楽・情緒という感情があり、これを基本として感情語彙の分析や感情動詞と類義語の考察もおこなった。感情動詞の英語やドイツ語の語源と日本語の成り立ちの違いに留意しつつ、日本語の感情動詞の語源からの変遷にも触れた。語源に触れることは、それらの語意を理解することにつながる重要性がある。また知覚動詞では擬態語を取り上げ、感情動詞では擬情語を取り上げた。オノマトペの考察で、身体反応変化が擬音表現され、比喩化される結果、身体変化が心理変化につながるというプロセスがみえた。

第4章は思考の種類から思考動詞を分類した。思考は回路が脳の神経伝達回路において運動野に近いことから動作動詞に近い機能を持つ。そのことが他の心理動詞ではあまりみられない意図性・意志性というコントロール性をもつ語を思考動詞に含めることになる。コントロール性のある場合は意図的・意志的に思考を終了させることができ、コントロール性のない場合は終了が明確でない。この2つのタイプの思考動詞がみだされた。また動作が生み出す思考動詞や、思考が生み出す思考動詞の例なども取り上げた。

第5章では局面指示体系による心理動詞のアスペクト分析を4つの動詞群においておこなった。局面指示体系による分析はもともと動作動詞と状態動詞に適応された研究であるが、心理動詞にも変則的ではあるが適応することができた。

第6章では開始・継続・終了を表す補助動詞との共起状況の視点から、先行研究を参考に、コーパスを用いてアスペクトを考察した。この場合、特に終了・完了が争点となる。先行研究ではインターネット検索の結果、心理動詞(特に思考動詞に多い)と「終わる、終える」との結合が数多くみられることがわかっている。しかし、その結果を詳しく文脈から分析してみると、純粋に思考動詞として用いられているかどうかについて疑問が残った。本研究で完了・完遂の補助動詞を4つの動詞群の動詞に結合させた結果、各動詞群で異なった特徴がみられた。

第7章では本研究の基礎的な方針に基づいて、生理的現象が言語表現を導き出す原因となる例をあげた。生理的限界点・閾値が局面変化完了認知基「タ」という言語表現と関連があることを明らかにした。さらに閾値という生理現象が知覚表象を言語化する場合、閾値という生

学位論文要旨および審査要旨

理学現象を軸にし、人間の錯覚によって起こる言語表現特有の現象のあることも取り上げた。また閾値における知覚動詞のアスペクトにも言及した。

このように本研究は、すでに科学の分野で研究がなされている現象を参考にすることで、心理動詞の低位分類の区分の裏づけが以前より鮮明になってきた。それにより、今まであまり手のつけられていなかった心理動詞のアスペクトをある程度把握できるものにした。

論文審査結果の要旨

[論文の概要]

日本語の「心理動詞」研究に対する新しい取り組みとして、「心理動詞」を、生理学・心理学等の知見に基づいて、「感覚動詞」「知覚動詞」「感情動詞」「思考動詞」の4つに低位分類し、それぞれの特徴を捉え、それぞれがどのように言語表現されるかを論じている。また、先行研究ではほとんど認識されていなかった心理動詞のアスペクトが、「局面指示体系」理論によって把握が可能になることを明らかにしつつ、心理動詞低位4種類のそれぞれの動詞についてアスペクトを詳細に論じている。心理動詞研究の新たな地平を開き、今後の「心理動詞」研究の進むべき方向を示唆する結果となっている。

[論文の構成]

目次

abstract(英文要旨)

はじめに

序章

- 1 日本語心理動詞のとらえ方
- 2 先行研究における心理動詞の概念
- 3 心理動詞の分類
- 第1章 日本語感覚動詞の特徴
- 0 はじめに
- 1 感覚動詞の定義
- 2 感覚動詞における情報源と受容
- 3 2種の認知法による感覚認知と言語表現
- 4 感覚動詞のアスペクトの二面性(絶対時間と相対時間/記憶と順応)
- 5 感覚動詞の擬態語
- 6 科学的定義と言語表現の相違
- 7 まとめ

第2章 日本語知覚動詞の特徴

- 0 はじめに
- 1 先行研究における「知覚動詞」
- 2 知覚動詞の定義
- 3 知覚動詞の分類
- 4 知覚動詞のその他の特徴
- 5 まとめ

第3章 日本語感情動詞の特徴

- 0 はじめに
- 1 先行研究における「感情動詞」
- 2 科学的視点からの「感情」のメカニズム
- 3 日本人の「感情」
- 4 「感情動詞」の分類
- 5 「感情動詞」の類義語
- 6 対象変化による感情動詞の語選択
- 7 漢語起源の語の比較
- 8 問題点
- 9 まとめ

第4章 日本語思考動詞の特徴

- 0 はじめに
- 1 思考とは何か
- 2 言語における「思考」の定義
- 3 日本語思考動詞
- 4 擬態語起源の思考動詞
- 5 派生的・價用的表現の思考動詞の特徴
- 6 思考動詞の類義語
- 7 まとめ

第5章 日本語心理動詞のアスペクト1—局面指示体系による分析—

- 0 はじめに
- 1 局面指示体系モデル
- 2 感覚動詞(受動的情報感知動詞)のアスペクト
- 3 知覚動詞のアスペクト

- 4 思考動詞のアスペクト
- 5 感情動詞のアスペクト
- 6 「テアル」と「テシマウ」の解釈
- 7 まとめ
- 第6章 日本語心理動詞のアスペクト2—局面動詞との共起状況から—
- 0 はじめに
- 1 心理動詞と時間的な観念についての先行研究での解釈
- 2 複合動詞の解釈
- 3 心理動詞とアスペクト性の複合動詞の結合に関する先行研究
- 4 心理動詞と完了・完遂の複合動詞の共起関係の再考
- 5 心理動詞と完了・完遂の複合動詞
- 6 考察すべき点
- 7 まとめ
- 第7章 生理的限界点「閾値」と局面変化完了認知基「タ」の関係
- 0 はじめに
- 1 生理的境界点・閾値と局面変化完了認知基「タ」の関係仮説
- 2 局面変化完了認知基と知覚動詞
- 3 「感覚」と「知覚」の「閾値」到達
- 4 「知覚動詞」における「閾値」到達認知分類
- 5 閾値に関する知覚動詞のアスペクト
- 6 「テクル」の視点からの閾値
- 7 まとめ
- おわりに
- 参考文献
- 付録 心理動詞分類一覧表
- 心理動詞のアスペクト一覧表

[論文各章の内容]

はじめに

心理動詞の研究は内外ともに1990年代に始まった。日本では、人の内面を表す動詞の研究そのものは1970年代からなされていたが、それが心理動詞として研究されることになり、徐々に体系化がなされてきた。一方、脳科学等の分野でも言語的な分析が行われてきており、その報告も数多い。言語学以上に多くの言語分析や研究に触れている場合もある。しかし、言語学と他科学との間でお互いに情報が共有されてきたとは認めがたい。

言語学は主として言語学的知見と経験により、例文分析などを通して結論を導いてきたが、科学的な信頼性の高い結論にまで到達できたとは言いがたい。心理動詞に関しては用語も他科学との間にずれが見られ、低位分類も正確に行えているとは言いがたい。

心理動詞の研究にはまず心理のメカニズムを知る必要があり、その知見に基づいて理論を構築する必要があると考えられるが、本論文はこの見解のもと、心理学等の研究成果を取り入れて、心理表現をよりの確に把握することをめざしている。

序章

日本語心理動詞を考察するに際し、本研究の独自性を、筆者の作成した「発話者における情報処理過程」の図に基づいて説明し、明確にする。先行研究を概観し、それらの理論も参考にしつつ、新たな心理動詞の分類を科学的根拠に基づいて行うことを述べている。

第1章 日本語感覚動詞の特徴

「五感」とは「視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚(皮膚感覚)」である。本章では、言語的表出方法に個人差の大きい「情動・感情動詞」や「思考・認知動詞」を扱うまえに、より直接的な身体反応である五感に関する「感覚動詞群」の分析を試みる。ここで、感覚動詞を「五感に直接関わる第一次的な反応に対する言語的表現」を行うものと定義している。(なお、五感に運動感覚、平衡感覚、内臓感覚を加えて、感覚を8種類に分類する立場もあり、本論文でも、五感以外の感覚にも言及している。)

先行研究では「五感」は言語学的にしか分析されていなかったの

であるが、本研究では生理学的に定義を行った結果、五感それぞれの特徴を次のように捉えることになった。

- ・五感の情報源までの距離と情報感知に関する動詞分布に特徴があること。
 - ・視覚と聴覚には「受動」の機能を持つ感覚動詞があるが、味覚・触覚にはこの動詞がないこと。
 - ・嗅覚には情報感知動詞として「嗅がゆ」が存在したが、現代語には伝わっていないこと。
 - ・現代語では嗅覚・味覚・触覚は情報感知(受動的)動詞を持たず、「名詞+(カ格)+する」で表現されること。
- また、「感覚動詞」のアスペクトについては、基本的には情報受容継続中の「進行局面」に重点があるが、五感それぞれに違った特徴があることも明らかにした。
- ・視覚には「情報を受容器官で受容している絶対時間」と「認知による時間」がある。
 - ・聴覚と嗅覚には、「順応」による認知があり、アスペクト認識に影響を与える。
 - ・触覚・味覚では刺激源が直接身体に接触するため、接触時間の長短により「継続的または瞬間的な表現」になる。

さらに、刺激源の「質」「種類」「程度」により言語表現(擬態語)は多種存在するが、時間によって「質」が変化する可能性があるため、使用される擬態語も変化する場があることが判明した。先行研究は主として言語という観点から見てきたために五感それぞれの詳細な特徴と相違まで把握することはできなかった。

本研究は五感の特徴を捉えることができたので、今後、これを踏まえて、感覚動詞のアスペクトに関連した後項動詞との結合関係や人称との関係などについてより詳しい研究を進めることが可能となった。

第2章 日本語知覚動詞の特徴

「知覚」は、感覚から感情・思考へと進む認知過程の中の中間プロセスに位置する。それで「感覚動詞」の次は「知覚動詞」を扱う。

先行研究には、例外はあるものの、「感覚動詞」と「知覚動詞」とを分けられないものもあったり、分けても指し示す内容が逆になっていたりするものがある。「感覚」と「知覚」についての見解が生理学や心理学の見解と少々異なっていたり、認識自体が曖昧であったりすることが指摘できる。

本論文は、まず、生理学・心理学等の分野での「知覚」の概念を総合的に考察し、「知覚」の定義を見出し、それに基づいて「知覚」から生じる言語表出である「知覚動詞」の定義づけを行っている。

知覚は感覚より高次にある。感覚は単純に刺激が信号として身体反応を起こしているだけであるが、その信号が知覚されて初めて個々の判断となり、感情へと進むとみられている。このような理解のもと、知覚の言語化はその知覚で起こった表象・心象の投影が音声化や文字化等の形で表出したものである、と定義するのが良いと考えている。

その結果、知覚の言語化した「知覚動詞」を3つの視点から考察・分類する。

分類Ⅰでは「知覚」を生理学的原因と症状の認知という視点から考察している。人間の知覚においては身体変化の原因と症状発生の身体部位が必ずしも一致しないことが多いため、「知覚」を言語表現する場合も、原因の部位によってではなく、症状発生の身体部位によって表現することが多くなる。つまり、「知覚動詞」は症状発生の身体部位での「知覚」を表現することになる。

分類Ⅱでは「感覚」が主に「身体」に作用するのに対し、「知覚」は「身体」と「精神」双方に作用する特質を持つという観点に立って、「知覚動詞」を4種類に分類している。

- (1)身体作用と精神作用が個々に独立して言語表現される語(例:「疲労」系)
- (2)身体作用のプロセスを投影して精神的言語表現が行われる語(例:「爽快」系)
- (3)身体作用が精神に投影されて言語表現される語(例:「麻痺」系)
- (4)精神作用が身体作用に影響して言語表現される語(例:「のぼせ」「悪寒」系)

分類Ⅲでは「知覚」に関連した言語表出がなされるプロセスを考慮しつつ「知覚動詞」をアスペクトのあり方によって4種類に分類している。

- (1)瞬間反応型……結果状態に重点。(「くらむ」類)
- (2)瞬間認知型……結果状態に重点。動詞事象の開始以前に前兆がある。(「すっきりする」類)

(3)短期継続型……進行過程が言語化される場合もあるが、閾値に関わる局面変化認知により結果状態に重点がある。(「お腹がすく」類)

(4)一般的継続型……進行局面に重点。結果状態はほとんどない。(「頭痛がする」類)

このように様々なアスペクトがあるのは、「感覚動詞」では刺激・信号の受容に受動的なかたちで関わるため「進行局面」にのみ重点があるのに対し、「知覚動詞」の場合には受容した信号を身体が認知し反応するまでの間に、複数の要因があるためである。

以上の分析に加えて、意味の拡張にも言及している。

さらに、擬態語にも言及し、「感覚動詞」では擬態語が「触覚」表現に集中するのに対し、「知覚動詞」ではあらゆる身体部位での表現に擬態語が用いられることを明らかにしている。

第3章 日本語感情動詞の特徴

「感情動詞」の特徴を、「感情」の発生から「感情」の言語表出までのメカニズムをたどる形で考察している。

刺激信号が感覚受容器を通して受容され、知覚として認知された後に分岐する一つの経過点で「感情」が発生する。「感情」はさらに「思考」という高次機能へ伝達される場合もあり、また、身体機能(運動野)に様々な影響を及ぼす根源になる場合もある。このようなメカニズムを考慮にいれ、「感情動詞」の特徴を分析・分類する。

前章までの「感覚動詞」と「知覚動詞」は「感覚」と「知覚」の言語表現であり、それらはある程度「身体反応」に直接影響されるものであった。その意味では、実際に身体で行われている生理作用にしたがって語の性質、分類、アスペクトなどを分析することができた。しかし、「感情動詞」における「感情」については、身体反応の分析と言語表現との対照のみで分析が行えるわけではなく、心理学、哲学、文化的背景といった分野も考慮しなければ、分析が不備になる。

論者は、運動・思考系と感情・情動系の脳における処理の部位が大きく2つに分かれることから、思考と感情は分けて考察するべきであると考えられるとしている。

続いて心理学の視点から情動・感情について検討し、原始的な感情に近い感情から上位感情への発展過程をみることの重要性を考察したうえで、日本語感情動詞としての語の例を明らかにしている。

心理学の視点から、さらに、「本能・欲求・高次感情」を階層的に考察する必要があるとし、マズロー、エクマン、ジェームス、フロイト、マツモト、ダマシオ等の学説を検討している。その結果、感情が下位分類されることが明らかになった。さらに、情動については「基本情動」の定義がなされること、また、感情については、「欲求段階説・本能説・自覚レベル説」などにより、本能(動物的・生得的)より上位に至る感情段階(社会性など)の分類ができることが明らかになった。

以上から、「感情」という概念が明らかになり、「感情動詞」についての考察を進める準備ができた。

次に、日本人の情緒・感情の特徴に言及している。エクマンを採用しつつ、日本人には一般的な心理理論がそのまま適用できない感情表現の特殊性があるとし、日本語を扱うには、さらに日本人の感情を分析し、特徴を把握する必要があるとしている。そこで、日本人の情緒を哲学者の九鬼の考察や、喜怒哀楽という日本的な情緒の分析から、日本人の傾向を探り、その結果、日本語感情動詞を次のように捉えることになった。「日本語感情動詞」というのは「基本情動」に、3つの軸(快・不快、緊張・弛緩、興奮・沈静)と日本の社会的・歴史的背景を加味して使用されるようになった(表情・態度に直接つながらないこともある)情動・情緒・感情を表現する動詞である。

さらに続けて「感情動詞」の分類を行っている。日本語感情動詞を心理学での感情段階に引き当てることから始め、日本語における「快・不快」に関する語の対照や分布を詳細に検討している。さらに寺村による感情の分類からヒントを得て、アスペクトによる分類を行っている。また、動詞の種類の変遷(動作動詞、状態動詞、心理動詞が歴史的にどちらの方向に派生・意味拡張してきたか)により、英語・ドイツ語との比較を踏まえて、日本語の特徴を明らかにし、日本語の心理動詞には西欧語と異なった特徴があるとし、この点からも日本語心理動詞を分析する意義は大きい、としている。

「感情動詞」の類義語についても論じている。心理動詞の派生・意味拡張から類義語の観念がつかめるとし、分類の基準として3通りの基準を立てている。

1つ目は、感情の段階を基準とするもの(マズロー/ダマシオ)で、

生得的な情動から人間社会を背景とする高次の感情までを4つに分類している。これらの言語表現は、自己の世界から始まり、他者との関係の段階にある高次の感情になるにしたがって、相手・対象と自分との関係が重要になり、登場人物の立場や状況によって穏や文構造の揺れが生じやすくなる、とする。

2つ目として、「正・快/状態・中立/負・不快」という最も初期の原始的な感情(感覚感情)による3分類がある、とする。

3つ目は2番目の分類からヒントを得、さらに寺村の感情表現の分類にある状態的な感情と動きのある感情という発想を応用し、アスペクトからの分類を行っている。

日本語の先行研究では言語的特徴の側面のみから感情動詞を分類してきたが、本研究では、このように心理学的な根拠に基づき感情動詞の新たな分類を試みている。

感情動詞の擬態語の特徴や、慣用句表現についても考察するほか、感情動詞の歴史的变化や漢語起源の語についても触れている。

第4章 日本語思考動詞の特徴

まず思考の概念と分類を把握し、それらを基盤として思考と言語の関係を考察する。「思考」とは何かという枠組みがあやふやなまま、「言語表出」について語ることは、科学的根拠を持たないまま、経験論で片付けることになりかねない。そのような根拠を持たず、どの分野の研究者が処理しても、研究上のおぼろげなまま。

思考(思考の3機能)とは、概念・判断・推理の脳内活動を指す。その活動は、心的過程もしくは心的操作という作用により、目的を達成する。言語における思考には、2通りの解釈がある。まず一般判断のように、判断や推理などの心的過程を経由し、心的操作を伴い、問題解決に導く一連の思考過程、つまり明確な意図性・意志位による思考活動を思考と考える解釈である。もう1つは、全く意志性や意図性がなく、自然発生的に考えなり、思いなりが湧き上がってくるものであり、この場合になされる言語表現を思考と考える解釈である。いずれにしても、言語表出は一連の心理活動(思考活動)の最終段階であり、言語表出以前の心理(思考)の表象をこぼに投影したものであると考えられる。したがって言語の研究ではあっても「思考」についての明確な考察が必要である。

このようにして、思考について、一般的科学理論や種類、構成要素等の側面から詳細に検討を続けた後、思考と言語のつながりについても詳しく考察している。そして、思考は言語と密接な関係にありながら、その反面言語は思考を撓乱することもあると述べている。

以上のように、本章では思考と言語との関係について述べた上で、思考と思考動詞の定義を行っている。

さらに、思考動詞は、思考活動を意図性・意志性でコントロールできる場合と、自然発生的な思考活動を表現する場合との2面性を持つともしている。コントロール性は動詞のアスペクトに関係する。コントロール性のあるもの(計画や問題解決)は、「中断」することができるという特徴があり、この点において「感覚」「知覚」「感情」とは対照的である。

次に日本語思考動詞の分類に言及し、先行研究による分類をいくつか示したのち、アスペクトによる分類を提示している。「考える」を中心にアスペクトの特徴を考察したのち、思考動詞を「継続動詞」的性質を持つもの、「瞬間動詞」的性質を持つもの、両方の性質を持つものに分類している。また、意志性・意図性のあるものとなないもの、その両方の性質を持つものにも分類している。

ほかに、思考動詞は擬態語を思考の様態の表現としては使用するが、擬態語そのものが思考動詞となることはないことを述べ、また、派生的・慣用的表現の思考動詞の特徴について論じ、さらに、思考動詞の類義語に言及している。

第5章 日本語心運動詞のアスペクト1-局面指示体系による分析

先行研究では、心理動詞のアスペクトの存在を確認することはできない、あるいは心理動詞はアスペクトから解放されている、という認識であったとみられる。しかし、心理作用が働き、心理が表出されるという事実は、生理的にも心理的にも「実際に」時間経過とともに生起している。現実の心理作用には時間経過があるのに、言語としての心理動詞に時間経過が把握できないとして処理するのは短絡的であると考えられる。ここで、今泉(2000)の「局面指示体系」理論による分析方法を採用し、考察を始めている。今泉が動作動詞と状態動詞の全てのアスペクトパターンを分析していることから、心理動詞においてもこの理論でアスペクト性を証明できるという仮説を立て、今泉モデルに心理動詞の下位分類動詞(感覚動詞、知覚動詞、感情動詞、思考動詞)を適用して考察している。

「感覚動詞」では、経験者が自らの意志をもって情報受信をコントロールすることはできず、刺激の消滅と共にその状態が終了する。五感の感覚器官が刺激を受信している間のみ、進行局面として認知が強調されるだけであり、感覚動詞には結果状態継続中の局面がない。

これに対し、「知覚動詞」は進行局面にあたる認知は瞬時に行われるため表現されず、その後の結果状態継続中が表現される。

「思考動詞」の場合にはアスペクトの多様性がある。意志性・意図性がある場合は、より動作動詞的なアスペクト(「テイル」が3つの局面を持つ)を示し、ない場合は進行局面の完了が不明瞭なアスペクトを示す。

瞬間動詞の観点からは2種類のものがある。知識・情報獲得を目的とした瞬間動詞「知る、分かる、理解する」などは、知識・情報を認知する以前の(0の)段階があり、実際のアスペクトはそこから始まる。(4の)結果状態継続中に重点がある。一方、「ひらめく」は、集積された無作為の記憶が照合される結果、認知が偶然性をもってなされた事象であるため、(0の)開始以前の段階は含まない。また実際には(4の)結果状態は存在するものの、関心のある出来事としてはその瞬間のみなので通常(4)は言語表現がなされない。このように両者間には(0の)開始以前と(4の)結果状態継続中の解釈に相違がある。

「感情動詞」のアスペクトにも多様性がある。目的語の違いにより2種類の継続動詞が区別され、「愛する、憎む、恨む、恋する」等は、終了には「自然消滅タイプ」と「興味喪失タイプ」との区別があるが、共通する点としては、結果状態継続中と(5の)結果状態継続の完了(消滅)が表現されず、進行局面に重点がおかれるという特徴がある。

さらに瞬間動詞という観点から「驚く、キレる」と「かつとする、ドキッとさせる」等を考察し、また認知・評価の反応という観点から「失望する、落胆する、がっかりする、しらける」等を考察している。「テアル」が、心理動詞が意志性を持つ場合に付くことに触れ、また「テシマウ」が心理動詞の開始局面に付く場合のあることにも触れている。

第6章 日本語心理動詞のアスペクト2-局面動詞との共起状況から

第5章では理論を通じて考察したのに対して、第6章では実践を通じて心理動詞のアスペクトを考察している。局面動詞との共起状況という視点からの考察になる。

先行研究では、データとして、心理動詞に分類されている動詞と「始める・終わる」等のアスペクト(時間)を示す後項動詞が共起した用例を提示することで、心理動詞の時間的観念、特に終結点の存在を証明できると考えている。しかし、それらの用例の心理動詞が本当に心理動詞として機能しているのかということについて疑念を禁じ得ない。そこで、本論文は改めて心理動詞のアスペクトのあり方と完了・完遂の後項動詞との共起について分析しつつ、どのような要素がそれらの結合を可能にしているのかを考察している。先行研究ではインターネット(Google/GOO)によって例文を検索し、考察しているが、本研究ではさらに新聞記事と小説という資料を加えて分析を行う。

多くの事例の検討から、心理動詞は、複数の理由から完了・完遂というアスペクトの概念を持ちにくいという結論に至った。

結論1:終了・完了・完遂の局面動詞が心理動詞と共起する場合、2つの場合が考えられる。一つは「意志性・意図性」のコントロールができる場合であり(例「考える」)、もう一つは、動作動詞と心理動詞の2面性を持つ語が動作に重点を置いて使用された場合である(例「祈る」)。

結論2:一見「共起」しているように思われる関係でも、別の意味や状況で「結合」しているにすぎない場合がある。後項動詞となる局面動詞に複数の意味が発生し、必ずしも「終了や完了」の意味でないこともある。また前項動詞となる心理動詞も同様で、動作として解釈される場合がありうる。よって前項と後項の両方から観察していかなければならないと考える。

結論3:複合動詞を扱う場合、慣用的表現も考慮しなければならない。類義語といえる語でも、慣用性等の相違から頻繁に使用される結合例と使用されにくい例とがある。

結論4:動詞の進行や終了も多様である。感情動詞、知覚動詞のようにON/OFFによって進行局面と完了の局面が表現されるものでも、程度の質に違いのあるものがある。感情動詞の程度の質は、心理の「深さ/浅さ」で表現され、脳の中にその基準がある。知覚動詞の程

学位論文要旨および審査要旨

度の質は“強度や量”にある。慣用的な表現にも終結時間のとらえ方のヒントがある。

結論5:主観性と客観性との差異から考察することもできる。

このような現実の時間の流れと心理的時間の流れの相違をどのように把握するかは心理動詞研究の今後の課題となる。

先行研究では心理動詞を「心的情感動詞」、「感情動詞」、「心理動詞」などとして扱い、完了・完遂の後項動詞との共起データを対象として調査してきた。しかし、そこで「心理動詞」として扱われている動詞は本来の「心理動詞」的用法にないものもあることが判明した。

第7章 生理的限界点「閾値」と局面変化完了認知基「タ」の関係

心理は心の内側にあり、他者は言語表出によってその心理を知る。このため心理現象と言語表現の関係をすることが重要となる。本研究では生理学・心理学等で打ち立てられてきた理論が言語の諸現象の解明に貢献すると考えているが、本章では生理的限界点「閾値」と日本語表現の関係を考察する。

心理動詞の中の「知覚動詞」のアスペクト表現の一つである「タ」（局面変化完了認知基）が、生理学の現象である「閾値」の認知にしたがって言語表出されるという仮説を設定した。「閾値」には段階があり、局面変化完了基にもいくつかの側面がある。そこで、どのような場合に「感覚」となり「知覚」となって認知されるのかを詳しく分析し、日本語表現との関係を考察した。

その結果、日本語では「閾値」を認知した直後に「タ」で言語表現されるという裏づけを得て、上記の仮説の妥当性を確認した。知覚動詞の場合、この「タ」は「局面変化完了認知直後のタ」に該当する。これにより生理的限界点「閾値」と「タ」という表現が重なることが明確になった。

おわりに

心理動詞の研究には他分野、特に心理学的な分野の理解が必要であるか、という問いに対して、筆者は一貫して、心理学的な分析を交えた言語学的な分析の必要性を主張してきた。この主張の妥当性について論述している。

次に、本論文の内容をまとめている。さらに、研究の今後の発展のために留意すべきことをいくつか述べ、最後に、実際の言語表現はあまりに複雑かつ偶然性にも左右されることから分析が困難であると思われるが、これらの課題も今後解明していきたい、との決意を表明している。

付録

「心理動詞分類一覧表」「心理動詞のアスペクト一覧表」として合計13の表を作成・掲載している。本論文の内容理解の助けになる。

[論文の特徴]この論文には次のような特徴がある。

- ①「心理動詞」の研究は1990年代半ばより始まり、いまだ20年に満たない。先行研究では「心理動詞」と諷いながら、実は動作動詞との区別ができていないものもある。また、そもそも「心理動詞」を特立する必要性を認めない研究者もある。このような研究状況下にあるながら、本論文は生理学、心理学等の研究成果を援用して考察を進め、「心理動詞」を動作動詞と区別して特立する必要性を論じている。
- ②本論文では①の考え方に基づき、「心理動詞」を「感覚動詞」「知覚動詞」「思考動詞」「感情動詞」に分類している。先行研究では「感覚動詞」と「知覚動詞」の指す内容が逆であったり、それぞれの動詞の定義に曖昧なところもあった。
- ③先行研究では「五感」を言語学的にしか見ていなかったが、本論文は「五感」を中心に分析し、「感覚動詞」について各語の特徴と相違を捉えながら記述している。
- ④「知覚動詞」は知覚の原因部位ではなく、それを発生する身体部位での表現となることを明らかにした。
- ⑤「知覚動詞」を、身体と精神の両方との関わりから、4種類に下位分類する必要性のあることを主張した。
- ⑥「知覚動詞」を、刺激・信号を受け入れる際のアスペクトのあり方から4種類に下位分類する必要があることを主張した。
- ⑦擬態語は、「感覚動詞」では「触覚」表現に集中し、「知覚動詞」ではあらゆる身体部位で表現されることを明らかにした。
- ⑧英語・ドイツ語の心理動詞との対比において日本語心理動詞の特徴を明らかにし、これを研究することの重要性を主張した。
- ⑨「感情動詞」の類義語の分類のための基準として3通りのものが

あることを明らかにした。

- ⑩思考と「思考動詞」を定義し、両者に意志性のある場合とない場合のあることを明らかにしたが、これは「感覚動詞」「知覚動詞」「感情動詞」と異なる特徴を有する面があることを示したことになる。

- ⑪「思考動詞」をアスペクトの側面から、また意志位の側面から分類した。

- ⑫擬態語は思考の様態を表現することはできるが、「思考動詞」そのものになることはできないことを明らかにした。

- ⑬最も重要な本論文の特徴は「局面指示体系」理論を「心理動詞」に適用し、それぞれの動詞のアスペクト表現の特徴を明らかにしたことである。「感覚動詞」には結果状態継続中の局面がない。

「知覚動詞」には進行局面がない。「思考動詞」は継続的・意志的であれば動作動詞と同様のアスペクト表現をとり、継続的・非意志的であれば完了が不明確になる。瞬間的動詞の場合は、前段階があって、結果状態継続中に重点があるものと、前段階がなく、結果状態継続中の表現されないものの2種類がある。「感情動詞」は進行局面に重点がある。完了には自然消滅と興味喪失の場合があり、結果状態継続中は表現されない。また、進行局面完了の把握しやすいものもある。

これは同時に「局面指示体系」理論が心理動詞にも適用できることを明らかにしたことを意味する。

- ⑭「心理動詞」と局面動詞との共起について調査し、心理動詞は完了・完遂のアスペクトを持ちにくいことを明らかにし、その理由を述べた。これは同時に先行研究での調査の不備を指摘することにもつながっている。

日本語では「知覚動詞」を局面変化完了認知基「タ」とともに用いることがあるが、これは生理学の現象である「閾値」の認知されたことの表現であることを明らかにした。

[今後の課題]

本研究では、日本語の心理動詞を下位分類する根拠を確かなものとするために、生理学・心理学等の研究成果に学んでいる。言語表出される人間の心理をそのような分野の研究成果に基づいて考察することは、特に心理動詞の研究には欠くことのできない重要なことであると考えられる。しかし、異なる分野の研究成果であることでもあり、その扱いには十分注意が必要である。本論文に論述された内容もその妥当性については今後さらに検討が加えられなければならない。そのような他分野での研究の進展にも注意深い目配りを欠かすことができない。

現段階での研究が博士論文としてまとめられたが、これは心理動詞研究の終結点を示すものではなく、新しい出発点を示すものである。この出発点に立つに際し、このような課題について改めて認識する必要がある。

[研究史における意義]

扱いが曖昧であった日本語の「心理動詞」を、生理学・心理学等の知見に基づいて考察し、「感覚動詞」「知覚動詞」「感情動詞」「思考動詞」に分類し、それぞれの特徴を細かく捉え、それぞれがどのように言語表出されるかを明らかにしたこと、及び、先行研究ではほとんど認識されていなかった心理動詞のアスペクトが「局面指示体系」理論で把握できることを示したこと、この2つは、心理動詞の研究に新たな地平を開いたことになり、今後の研究の進むべき方向を示唆したことになる。また、「局面指示体系」理論が心理動詞にも適用できることを示したことも意義がある。

[評価]

以上により、本論文は内容的にも、研究史的にも大きな意義の認められる論文であると評価できる。このため、審査者一同は、論者である関口美緒氏に博士号授与がふさわしいとの判断に至った。